

セクシュアル・マイノリティ運動論における《デモ／祭》枠組みの再考
 ——砂川秀樹による「00年パレード」の理論に着目して——

堀川 修平

I. はじめに

1 課題意識

本論文は、「日本のセクシュアル・マイノリティ運動の変遷から見る運動の今日的課題 [堀川, 2015]」でわたしが提起した、日本のセクシュアル・マイノリティ¹⁾運動における《デモ／祭》枠組みについて、2000年に行われた「第1回東京レズビアン&ゲイパレード」(以下「00年パレード」と表す)の理論を主体形成に着目しながら再考することを目的とする。なお、《デモ／祭》枠組みとは、日本のセクシュアル・マイノリティ運動の戦略、とりわけパレードという手法をもちいたものの戦略が、デモンストレーション中心から、マイノリティの存在を可視化することを重視した祭中心へと変化していったことを示すものである。

2010年代に入り、日本においてはセクシュアル・マイノリティの権利獲得運動が一種の「ブーム」のようにも見受けられるような形ですすめられている²⁾。セクシュアル・マイノリティの社会的認知が高まるなかで、依然としてセクシュアル・マイノリティ差別が十分に解決されていないことも重ねて論じられてきた [釜野ほか, 2016]。

これまでわたしは、セクシュアル・マイノリティ運動を対象にしながら、一貫してセクシュアル・マイノリティ差別を乗り越えようとする人びとに着目してきた。手法としては歴史的手法を用いているが、研究をすすめる中で、紙に残る史資料だけでは十分に迫ることができないことに気づき、そこから、実際に運動に携わってきた人びとのライフヒストリーに着目して、かれら³⁾が何故運動に携われたのか／携わろうとしたのかを分析しながら、運動の理論とそこで生きる人びとを描き出そうと試みてきた。かれらの主体形成に着目する中で、主体形成自体を「形式的」に、つまり「勉強会」や「学習会」のような、座学中心でおふざけなしで真面目に学ぶものというように捉えてしまっていたことに気付かされたことが⁴⁾、本論文での「再考」につながっている⁵⁾。

2 先行研究の整理ならびに目的と方法

(1) 先行研究の批判的検討

セクシュアル・マイノリティをとりまく差別状況や運動に関する研究は、ジェンダー・セクシュアリティ理論に関心を払ってきた社会学、文化人類学、法学研究者らによりなされてきた〔風間, 2002; 藤谷, 2008; 風間・河口, 2010; 堀江, 2015など〕。しかし、これらの研究も含め、セクシュアル・マイノリティ運動を主眼とした研究は、社会制度、判例や法、社会認知状況という、いわば社会的枠組みの分析から脱しきれていないという課題を乗り越えられないままであった。これまでの研究の課題として、歴史的手法を用いた考察は深められておらず、運動の発展の様相や展開される運動の連関について分析したものはほとんどみられてこなかったことがあげられる。

そのようななか、わたしは、歴史的手法を用いて日本のセクシュアル・マイノリティ運動の特徴に迫ろうとしてきた⁶⁾。男女の二分法を乗り越え、性の多様性を前提としようとすることを「ジェンダー平等」の視座と呼び、その視座に立ちながら日本のセクシュアル・マイノリティによるパレードに着目し、日本の運動が「デモ」から「祭」へと変化していったこと、つまり《デモ／祭》枠組みになっていることを明らかにし〔堀川, 2015〕、運動初期には、日本の運動を牽引してきた担い手の一人である南定四郎によって、彼の立ち上げた団体である「IGA/ILGA日本」の「学習会」活動で、参加したゲイの若者たちに自分たちが「被抑圧者としてのゲイ」であるのだと「意識化」する実践がなされていたことを明らかにしている〔堀川, 2016〕。このようにわたしはこれまでの運動研究で見落としてきた、運動の展開を歴史的に追うという作業をとおして、以上のような点を明らかにした。

しかし、すでに述べた通り、堀川〔2015〕で提示された《デモ／祭》枠組みには不十分な点がある。それは、2000年以降の運動(とりわけセクシュアル・マイノリティによるパレード)が「祭」のように「楽しさ」を前面に押し出していったものであり、堀川はそこには主体形成はないという図式で捉えている点である。堀川はこの後に執筆した論文においても、この《デモ／祭》枠組みをもとにして考えを深めているが、本研究で検討していく通り、この「祭」にも主体形成は存在していたのではなかろうか⁷⁾。

そもそも運動は、人びとによってなされる行為であり、人びとによって構成される集団である。人びとによってなされる行為であるとすれば、そこに参加し活動している一人ひとは、運動という集団の中で学び、育った人びとが運動していくと考えられる。そうであるとすると、これまでの運動研究において足りなかったのは、一人ひとりの主体形成はどのようになされて

いるのかということへの着目、つまり、どのようなことを学びながら主体形成していくのかに着目した教育的視点からの分析なのだといえないだろうか。教育的視点からセクシュアル・マイノリティ運動を分析することによって、セクシュアル・マイノリティ運動のとらえなおし、とりわけ《デモ／祭》枠組みのとらえなおしになると考える。

(2) 目的ならびに方法

以上の課題意識と先行研究の整理から、日本のセクシュアル・マイノリティ運動における《デモ／祭》枠組みについて、「00年パレード」の理論を対象に、主体形成の側面に着目しながら再考することを本研究の目的とする。

具体的には、堀川論文の批判的検討を行うが、その前提として堀川〔2015, 2016〕で分析の対象とした、砂川秀樹による「00年パレード」の歴史的意義、砂川実践の狙いとそれに対する評価をまず整理する。砂川秀樹は1966年沖縄に生まれ、HIV／AIDSの支援活動にかかわってきた。また、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学コースにて2008年に博士号(学術)を取得している。このように、砂川自身はセクシュアル・マイノリティ運動家として、また文化人類学研究者としてセクシュアル・マイノリティ運動に関わってきた人物である。そのような砂川の実践と理論を整理した上で、堀川が提起した《デモ／祭》枠組みを、主体形成の側面に着目しながら再考することが本研究の目指すところである。

本研究では堀川〔2015・2016〕で扱った資料はもちろん、それに加えて砂川秀樹が執筆した文書と筆者が半構造化インタビューで得た口述資料を分析の対象とする⁸⁾。具体的には、彼のインタビュー記事が載っているゲイ雑誌などを対象とし、特に、砂川自身によって監修・編集された『パレード』(ポット出版)を中心とする。この書籍は、本論で対象とする「00年パレード」の前後に出された史資料や、運動に関わった人びとの語りがかかっている資料であり、本論文で明らかにしたい砂川の意識や行動を分析するためには欠かせない資料である。本書に描かれた史資料自体が砂川によって「編集」「監修」されている、つまりピックアップされていることから砂川の実践と理論を追うためには、重要であるといえる。以上のような資料を中心とするが、砂川実践に行きつく過程をふまえて分析するために、「00年パレード」以前になされた運動に関する史資料も併せて用いたい。なお、以下で分析する資料では、「政治」や「攪乱」、「国家」などという言葉がそれぞれ多様な意味で用いられる。それらについては、適宜整理し、本論での意味も提示する。

Ⅱ 日本のセクシュアル・マイノリティ運動における「00年パレード」の位置づけ

日本におけるセクシュアル・マイノリティ運動は、1980年代にその萌芽を見いだせる。堀川〔2016〕によれば、日本の運動は、南定四郎(1931-)によって1984年にIGA日本(のちのILGA日本)が設立されたことに始まる。南定四郎は1931年に樺太で生まれ、その後株式会社岩出版1972年に設立、1974年にはゲイ雑誌『ADON』を出版するなど、日本のゲイの歴史を語るうえで欠かせない人物である。南は、今日も沖縄を中心に活動を続けているが、彼の初期の活動が、今日まで形を変えながら続く運動の基盤になっているといっても過言ではない〔堀川, 2015・2016〕。

この運動の先駆的存在である南が設立したIGA/ILGA日本、またその中でなされていた「学習会」活動においては、「ゲイに対する差別や偏見をなくする」というような「政治的スローガン」が掲げられていた。ここでいう「政治的スローガン」とは、国家(行政・政府)やマスメディアに向けて発せられる抗議を指す。IGA/ILGA日本から分離発展していったアカー(動くゲイとレズビアン(の会))においても対国家、対報道・マスメディア運動がなされ、セクシュアル・マイノリティ(とりわけ同性愛者)に対する差別を撤廃するという政治的スローガンのもとで運動が進められてきた。

1994年に東京で催された日本初のパレードである「第1回レズビアン・ゲイパレード」は社会変革のための「抗議活動」として編成され、そのような方針は、1996年に第3回パレードまでつづけられた。その第3回パレードは、日本のセクシュアル・マイノリティ運動のあり方を見直す一つのきっかけになったとも言える。それは、第3回パレードにて、これまでなされてきた南定四郎による運動の戦略やその方向性に「待った」がかけられたためである。

南は、第3回パレードにて、「宣言文」⁹⁾を提出しようと画策した。それは、その前年になされた第2回パレードにて、「第1回と比べて『全く反応がない』」〔堀川, 2015: 70〕という失敗を経験したためである。南はその背景には、パレードを中心にひびく実行委員たちの「社会変革意識のなさ」を問題として上げている。南にとって、実行委員会に参加した実行委員の大半が全く学習活動に参加しなかったことが問題であると捉えられ〔南, 2002: 18〕、「何故パレードをやるのか理解」することが重要であると考えられた〔堀川, 2015: 70〕。そのような意識から、南は「パレード」をなぜするのかという「宣言文」を作り、そこに要求項目を表した。その内容としては、日本政府と地域自治体に対して、「政策立案に当事者を参加させ」ることや、「マスメディアの差別表現を調査」させること、また、「『イジメ』の実体調査」をさ

せること、加えて、「日本国内の同性愛者および性的少数者の諸組織」に「不公正に抗議し、政治的、経済的、社会的、文化的基本権を促進するための連帯ネットワークを強化すること」を呼びかけるなど、セクシュアル・マイノリティの差別是正と人権を獲得するための提起がなされていた。南によれば、あらかじめこの「宣言文」を掲げているのだから、参加者はそれを把握して参加してもらいたいという意識があったという。

しかしながら、この「宣言文」をめぐる一部のパレード参加者との対立が起これ、パレード自体が「紛糾」するという「事件」が起きてしまう。南は、東京を〈中央〉とする日本のセクシュアル・マイノリティ運動の第一線を退くまで、一貫して真面目な「デモ」としての運動をすすめてきたが〔堀川、2015〕、このような「事件」のあと、日本の運動、とりわけ大人数を動員する運動は縮小の一途をたどることとなる。

Ⅲ 砂川の戦略と「00年パレード」における主体形成

1 砂川による「00年パレード」の戦略と方法

このような背景のもとで、大規模な運動を2000年に「第1回東京レズビアン&ゲイパレード」という形で「復活」させたのが砂川秀樹である。

砂川が「始まるのための始まり」〔2-3〕¹⁰⁾と表した「00年パレード」は、2000年8月27日に東京都渋谷区の代々木公園を中心に行われた。このパレードは、「歴史的1日」〔9〕、「永遠に忘れられない歴史的な日」¹¹⁾などと評されるほどインパクトの強いものであった。90年代から「ゲイ・ムーブメントの最前線」にいながら活動を続けていた伏見憲明も、このパレードを「2000年8月27日の前と後では、日本のゲイ・シーンは全く質的に変貌してしまうだろう」と評価している。このように、パレードについてさまざまな声が上がっており、今日ゲイ・マガジンの一つである『パディ』では、このパレードを「90年代の長かったゲイ・ムーブメントは、はっきりしたカタチとなって大爆発した」と興奮冷めやらない表現で評している。さて、この砂川による00年パレードは、一体どのような戦略でなされたのだろうか。

砂川は、「00年パレード」を復活させようと尽力したわけであるが、その際が一番気を払ったことが「脱政治化」であった。以下では、砂川による「00年パレード」で意図されていた「政治」、あるいは「脱政治」とは一体何を意味していたのかを資料を分析しながら明らかにするとともに、運動の手法を整理する。

砂川は、「00年パレード」の前後に、『パレード』へ自身の企画した運動の手法やねらいとなる戦略を書き記している。パレードの前後にゲイ雑誌へ記

事を掲載していたのは、後に触れるようにセクシュアル・マイノリティ、とりわけゲイに対してメッセージを発信し、人数を集めたいと考えていたことに拠るだろう。砂川は、そのゲイ雑誌の一つである『Badi』2000年11月号に、パレードを終えた後、以下のようなメッセージを残している。

——今回のパレードの意義については…

東京のゲイパレードが一度、規模縮小した問題など含め、ゲイパレードにあったややネガティブな印象を、少なくともゼロに戻そう、という思いはありました。[20]

『Badi』でのインタビューにおいてこのように語っている砂川は、1996年のパレード以降、日本において「ネガティブな」印象がゲイ・パレード自体についてしまったと考察している。そのネガティブな印象を「ゼロに戻す」、つまり、少なくともパレード自体の方向性を改めて考え直さねばならないという意味がここから読み取れる。砂川による「00年パレード」は、多くのゲイ雑誌で関係の特集や記事が組まれた。例えば、ゲイ雑誌『ジーマン』¹²⁾でもパレードについて記事が書かれており、このパレードが「成功」した理由についての考察が以下のように記述されている。

□「てんでんバラバラ」がいいじゃない！

今年のパレードが大成功した理由の一つは、テーマを決めなかった事。政治的な色合いがまったくなかったからこそ、いろいろなグループが自由に参加することが出来た。心から楽しみたい人たちもいれば、アピールしたいことを主張する人達もいる。[24]¹³⁾

この記事は、1996年に南によってなされた運動を「政治的な色合いがあった」と捉えている。そして、「政治的」な面が出てこなかったことが「成功」したことの要因の一つとして語られている。この「政治的な色合いがなかった」こと、つまり、政治的スローガンを運動の全面には掲げないということは、砂川によって戦略的に計算されていたことであった。

ここで分析したいのは、「政治」的とは、一体何であったのかということである。先に述べたとおり、砂川が復活させる前の南による運動は、デモ的な要素が強く、真面目になされた運動であった [堀川, 2015]。また、南は賑やかで楽しい「祭」のような要素を「遊びじゃないんだ」[川口, 2001] とたしなめていることからそれが読み取れる¹⁴⁾。

伏見は、砂川による「00年パレード」を、「以前のパレードは政治的だったというイメージを作」りながら、「そういう差異化を図って人を呼び込むという戦略だった」と分析している¹⁵⁾。このような方向性、つまり政治的スローガンを全面に出さずに運動を行うようになったというのは、砂川の運動観が大きく関わっているだろう。砂川はこの戦略について以下のように語っている。

2000年に「東京レズビアン&ゲイ・パレード」は復活する。(略)それは、筆者自身の自発的な動機によるものというよりも、むしろ多くの人の東京パレードの復活を望む声を引き受けるという形によるものだった。(略)2000年の東京パレードは、1996年の事件が残したイメージを払拭するために、「統一的政治的スローガンは掲げない」ということを全面に押し出すこととなった。また、それには、「政治嫌い」な人たちもまずこのパレードに参加して欲しいという筆者自身の思いもあった。その結果、2000年の東京パレードは、それ以前のパレード以上に幅広い層の協力と参加を得て、約2000人の人が渋谷の街を歩く結果となった。(略)[2000年から2002年の]この3年間の東京のパレードでは、実行委員会としては「政治的スローガン」を掲げないという方針が続いている。それが、恐らく、既存のデモと最も大きく異なる点であろう。[砂川, 2003: 100-106]¹⁶⁾

砂川論文を見ると、「政治嫌い」な人も参加させるための戦略として「政治的スローガン」を掲げなかったことがわかる。その戦略によって、参加者の数も増えたという。

砂川はいわゆる国家に対して運動するようなものを「政治的」と呼んで表している。ここでいう「国家」とは、堀川 [2015] でも提示している、日本政府や東京都(府中青年の家事件での被告)、また、厚生省や文部省(当時)などをさす。砂川は、南による運動の「失敗」をうけて、その「失敗」というネガティブな要素を取り除くことを戦略の根幹においたことがわかる。つまり、砂川や彼の運動を評したメディアにとっての「政治」とは、国家に対抗するものを指していて、「脱政治」とは、国家への抵抗的な運動ではないものを目指すことであったと分析できる。そして何よりも、セクシュアル・マイノリティ(とりわけゲイとレズビアン)が抱いた「ネガティブ」な要素を取り除くものと、それら「脱政治」が結びついていたことがわかるだろう。すなわち、砂川の戦略として「脱政治化」と「脱ネガティブ」とが重

なって捉えられていたと推測できる。

このように、砂川は「脱政治」＝「脱ネガティブ」ということを意識しながら「00年パレード」を進めていく。そのために、具体的には、パレードとして統一した「政治的」な、つまり国家に対抗するようなテーマを決めなかったことや、まさしく「祭」と表現されるような各種イベント——例えば、「ゲイ&レズビアンミュージックフェスティバル」や「合コンパディ パレード・バージョン」、また砂川がこの「00年パレード」を開催する際に肝いりにしていた「東京レインボー祭り」など——と抱き合わせる形で催されたことがあげられる。ここでは「脱政治」＝「脱ネガティブ」を意識していることがわかり、それらに対して、参加したセクシュアル・マイノリティらが肯定的なコメントを残している。しかしながら、「楽しさ」重視の運動について「単なるお祭り騒ぎ」[砂川, 2003 : 100-106]であると批判がなされた。しかし、砂川は、このような「批判」について以下のように反論している。

〔「政治的スローガン」を掲げないという方針について、〕確かに、「東京レズビアン&ゲイ・パレード」においては、一般的にイメージされるような政治的なスローガン（例えば権利要求や差別是正を求める文言など）を実行委員会として掲げることはない。既存のデモのようなシュプレヒコールも存在せず、宣言文の採択も行われぬ。しかし、政治性が、シュプレヒコールや宣言文のような形で示される言語的表現によってしか担われぬという発想では、パレードが提示している新しい表現方法の持つ可能性を汲み取ることはできない（無論、パレードの中でもプラカードなどを持ち言語的表現により権利を訴える人たちはおり、その存在意義は大きい）。また、個々人が「政治」という言葉で意識しない表現実践の背景にも、自身すらも把握していない「(広い意味での) 政治的な動機」が潜んでいることがあるということ、また、そのような動機がなかったとしても、パレードへの参加が結果として、政治的な表現となっているということを見逃してはならない。[砂川, 2003 : 104]

砂川は政治的スローガンを掲げるような「言語的表現」による政治性に対して、参加によって、またそれに伴うマイノリティの可視によってなされる政治性を「表象をめぐる政治実践」[砂川, 2003 : 105]と呼称している。例えば、セクシュアル・マイノリティの「屈託なく楽しんでいる姿が、『ゲイやレズビアンたちは、隠れて暗く生きている』という社会のイメージへの抵抗となることもあれば、多様な参加者が歩くパレードの様子が、一つのイメージに

固定化させようとする支配的な視線をも攪乱させる実践ともなる」と砂川は述べる。

つまり、砂川は国家には直接抵抗していないが、「社会のイメージへの抵抗」、つまり、「一般」の非当事者のもつ「社会のイメージ」に対しては抵抗していると考えているのである。この抵抗を砂川は〈攪乱〉という言葉で表している¹⁷⁾。このことに関わって、砂川は以下のようにインタビューで語っている。

あるときから思い始めたのは、LGBTの当事者運動ではなく、LGBT、もちろん他のセクシュアル・マイノリティもふくめて、人々がより生きやすい社会を作ろうと考えている人たちが仲間であって、そういう人が集まるような、「ミッション型」の運動がいいなって。同じ、アイデンティティをもっている人が集まれ！という「アイデンティティ型」の運動でなくて、共通の目標、賛同する人達があつまる運動をめざすのがいいなって運動をやり始めてから思うようになりました。(調査インタビュー)

砂川はまず、運動を「アイデンティティ型」と「ミッション型」とに分けてとらえている。砂川によれば、「アイデンティティ型」というのは、「〇〇だから参加する」という、性的指向・性別自認に基づいてなされる運動のことである。「アイデンティティ」をもとに集まることは、「仲間意識」を同時にそこで学ぶことでもあるといえる。

このようなアイデンティティ形成は、南の「学習会」で重視された手法であった[堀川, 2016]。しかし、そのようにアイデンティティをもとに集まると、「〇〇は気に入らない」という、性的指向や性別自認という「セクシュアル・マイノリティ」のカテゴリーで相手を判断・忌避して、運動に参加しないということにつながってしまうと砂川は考えているようである。

砂川は、そのような「分裂」を防ぐため、また、セクシュアル・マイノリティ運動における参加者の数の少なさを乗り越えるためにも、同じ目的のために集うという「ミッション型」が有効であると判断したのだと考察できる。

また、砂川は運動をすすめる際、ゲイ・コミュニティからの反発があったとのべている。そのような中で砂川が重視したのが非当事者の存在であった。砂川は、当事者ではないが、非当事者の中でも運動に好意的な人びとをアライズ (Allies)¹⁸⁾ と呼び、以下のように重要性について述べた。

だから、アライズっていうのが大切だなあって。特に、ゲイのコミュニティの中ではパレードなどでも当事者間の反発があるから、同じ〔セクシュアリティの〕「仲間」からの反発だときつい。でも、〔ミッションに対して〕賛同している人が「仲間」と思えば気持ちが楽で。しかも、LGBTが全部集まっても人数は少ない。だからこそ、〔ミッション〕に対する賛同者を集める必要があるとおもいました。（調査インタビュー）

これは、南によってなされた運動でもおこったことであるが¹⁹⁾、砂川はゲイ・コミュニティからの反発を回避し、運動として「成功」させるための戦略としても「ミッション型」が適当であると考えたのだろう。つまり、砂川は、運動をするという「ミッション」に対して賛同してくれる人を当事者、非当事者に関わらず集めていく必要があることを重視しているということである。このように「ミッション型」であれば運動参加者がセクシュアル・マイノリティなのか否かも混乱させる作用もあったのだと考えていたことがインタビューから明らかになった。

以上のような価値観を抱きながら、砂川は運動を進めてきた。砂川による運動の特徴は、先に整理したとおり、政治的＝ネガティブという要素からの脱却であった。そして、そのために楽しい要素を全面に出すような試みをしたこともわかった。このようにして「楽しさ」を全面に出せば人数を多く動員することができ、また「アライ」といった好意的な非当事者を動員できれば、誰がセクシュアル・マイノリティなのかも混乱させることができると砂川は考えていたのである。「楽しい」様子にいる人びとを多く可視化するねらいの一つとして、『『ゲイやレズビアンたちは、隠れて暗く生きている』という社会のイメージへの抵抗」、つまり砂川のいう〈攪乱〉があったのだ。

2 「00年パレード」の成果と課題

以上で見てきたように、砂川による「00年パレード」は、「脱政治」化＝「脱ネガティブ」なものをめざして、そのためにも「楽しい」雰囲気を出して人数を多く動員できるようにし、人数を多く集めることによって、これまでの雰囲気を〈攪乱〉しようとしていたものであった。また、人数を多く集めることで、誰がセクシュアル・マイノリティなのかを混乱させ、それによって、「パレる」ことに不安を抱く参加者の参加のハードルを下げていることが分かった。

さて、このような戦略によってなされた「00年パレード」の成果を一言で表すとすれば、砂川の思惑通り、人数を多く動員できたこと、そして、楽

しいという印象を与えられたことだろう。「楽しかった」[71]、「爽快感や幸福感」[73]、「僕の仲間は、こんなにも輝いて素敵なんだ」[73]、「僕の中ではいままでのお祭りの中でナンバーワン」[77] といった感想がゲイ雑誌などで取り上げられているが、ここからも「00年パレード」を好意的に捉えている人がいたことが読み取れる。

砂川は、「今回は、まず、楽しいお祭りのなものにしたいなって思っています。そういう風に言うと、ただの祭りをやっても意味があるの？ っていう人もいるかもしれないけれど、そのオープンな楽しいお祭りのなものを、ヘテロの人たちに見せることには大きな意味があると思うし、自分たちが仲間と楽しむ中で元気づけられることは、もっと大きな意味があると思う」[145] と事前に述べているが、この「楽しい」という側面には、セクシュアル・マイノリティ、とりわけゲイにとっての「エンパワーメント(力づけ)」[3] になるという意味があったと分析できる。このことに関して、伏見は「本人が人生を楽しんでいるというアピールが、なにより、ネガティブなイメージを変えていくうえで説得力を持つのではないのでしょうか」[156] と分析しているが、まさしくこの「00年パレード」には、セクシュアル・マイノリティのエンパワーメントになるという点での意義があっただろう。

このような意義があることはもちろんであるが、主体形成に関わる点で考えたいのが、当事者の「態度」の問題である。

砂川は、楽しく、祭のような運動を通して、「エンパワーメント」されることに意義を見出していた。しかしながら、それらの運動に対しては「次回も心から期待しています」[34]、「また来年も…いや、ずーと、この出来事が続いてほしいです」[74] というコメントも見受けられる。このようなコメントからは、自分が「中心」の1人になって、という意識よりも、誰かがお膳立てをしてくれるのを待つ姿勢がうかがえないだろうか。「続ける」のではなく「続いてほしい」という表現や、「期待している」というどこか他人行儀なコメントからは、参加者側の態度が受動的に感じられる。

確かに、楽しい雰囲気からエンパワーメントできた人びとがいただろう。また、生きるうえでの一つのモデルになるような人びとのイメージが出来たとも考えられる。しかしながら、「いま」生きる社会で生きづらい思いをしているということが砂川が催した運動の根本にあると考えると、単純に「その日だけが楽しい」という「祭」を称賛することは難しい。また、今一度当事者が「生きづらい」状況にあることを考えると、そもそも社会がヘテロノーマティブな社会であって、そこにいる多くの「一般市民」たちの側が問い直されてきたのか、つまり砂川の言う〈攪乱〉が成功していたのかも見直す必

要があるだろう。

砂川は、「露出が目立つというのは、〔運動の空間が〕昼間から〔行われているのもあるわけだし、〕家族連れで来てもらってる点でも戦略的に考える必要はある」ともインタビューで語っている。このように、「一般の」非当事者側への「配慮」がなされているのであるが、非当事者自身も社会の生きづらさを作っている一人なのだから、一緒に考えてもらうという〈攪乱〉の要素を提示する必要があったのではないかとすれば、むしろセクシュアル・マイノリティは「フツー」なのだという要素を押し出すのではなく、「フツーってなんだろうか」というメッセージを伝え、「表象をめぐる政治実践」[砂川, 2003: 105]で問う必要があったのではなからうか。

砂川が以上のようにコメントしているように、あくまでもここでいう〈攪乱〉とは、「一般の」非当事者が中心にいる、もっと言えば、ヘテロノーマティブな社会において「抑圧を感じていない」非当事者へ、セクシュアル・マイノリティが同化するはたらきを持ち得ていたのではないかと。つまり、フツーな社会を〈攪乱〉した側面よりも、むしろ強化する働きの方が強かったのではなからうか。

IV 《デモ／祭》枠組みの再考

以上のように、改めて砂川の運動について分析を深めた。主体形成に着目して「00年パレード」を分析することによって、本研究の目的であった《デモ／祭》枠組みを以下の表1のように新たに提示できると考える。

表1からもわかるとおり、運動の史資料を分析対象に主体形成という側面に着目することで見えてきたのは、以下のことだ。

まず、①抵抗する相手が「国家」から「一般の」非当事者へと変化していったことである。ここでいう「国家」とは、堀川 [2015]でも提示している、日本政府や東京都（府中青年の家事件での被告）、また、厚生省や文部省（どちらも運動当時の呼称）などをさす。また、「一般の」非当事者とは、本論文で整理してきたとおり、砂川が〈攪乱〉しようとしてきた対象をさしている。

次に、②手法自体は、「パレード」という形はそのままだに、質を転換させたことが挙げられる。質の転換とは、①にも重なる点であるが、「国家」に対するデモから、「一般の」非当事者に対する「表象をめぐる政治実践」[砂川, 2003: 105]としての祭へ舵を切ったことをさす。

そして、③南の「失敗」を乗り越えようとした一方で、「一般の」非当事者への同化の側面が強まってしまったということが挙げられる。砂川の運動理論で重要なのは、「脱政治」化、あるいは「脱ネガティブ」であったことは、

史資料から読み取ってきた。過去の社会運動のイメージから運動参加者同士、あるいは「運営」者側と参加者側との「関係性」をこわさないため、運動という空間で「もめごと」を起さずに、運動を円滑に進めるためにも、社会運動において「政治」という忌避を抱きやすいものから遠ざかり「政治的なスローガン」を掲げない運動が選択したことが読み取れた。

表1 《デモ／祭》枠組みの再考 試案²⁰⁾

	「デモ」としてのパレード		「祭」としてのパレード
中心を担った主催者	南定四郎	アカー	砂川秀樹
おおよその時期区分	1980年代～	1990年代～	2000年代～
	「国家」への抵抗		「一般の」非当事者への抵抗
主体形成に関わる点	<ul style="list-style-type: none"> ・被抑圧者としてのゲイ (セクシュアル・マイノリティ) ・アイデンティティの獲得 ・人権、権利獲得 		<ul style="list-style-type: none"> ・セクシュアル・マイノリティの可視化 ・楽しく生きられるのだというイメージとエンパワーメント
手法	<ul style="list-style-type: none"> ・学習会 ・デモのパレード 	<ul style="list-style-type: none"> ・裁判(対国家) ・対マスメディア (表現方法への批判) 	<ul style="list-style-type: none"> ・祭的パレード ・「脱政治」化＝「脱ネガティブ」 ・フェスティバルとしての可視 ・対「一般」の非当事者
実態	<ul style="list-style-type: none"> ・世代／地域の広がり 	<ul style="list-style-type: none"> 「普通の」ゲイ像 [井田,1997] 	<ul style="list-style-type: none"> ・「非日常的」側面の強調 ・「受動的」な主体の形成
	運動＝「ネガティブ」という印象		「一般」への同化

しかしながら、そこでの「楽しい」ふるまいで、パレードのひとつときだけ「解放」され(たと思ひ込み)、ひっそりと抑圧されるヘテロノーマティブな日常生活へと戻っていくセクシュアル・マイノリティ(とりわけ男性同性愛者)の姿は、日常的には「クローゼット」に隠れ、むしろ「クローゼットの充実」をめざし、「クローゼットへの解放」[前川, 2017]をめざしている現状からも伺える。今日、セクシュアル・マイノリティ運動が「フェスタ」と名付けられ、まさに「祭」のような様相を呈していることから、単純にある空間は「非日常的な」空間になっているのではないだろうかと推測できる。つまり、人びとは「日常」の変貌、日々生きる社会の変貌を真に求めているのではなく、「楽しい」空間を求めて参加しているのではないか。

V おわりに

以上のように批判的な検討を重ねたが、決して「00年パレード」やこれまでの砂川の運動に意味がなかったといたいわけではない。いわゆる「ただの揶揄なら(あるいは悪口のご注進だけなら)、うとうしいからやめてほしい」[68]²¹⁾というような厳しい発言に対して誠実に向き合うとすれば、深

く史資料を読み込みながら“成果”にもきちんと目を向けて評価することが必要だとわたしは考える。

砂川がこだわっていたことは、まずその場を生きる人びとの「エンパワーメント」であったのだと読み取れ、楽しく生きる／ている人びとを可視化しようとしたことは、セクシュアル・マイノリティに一つの生き方、あるいは差別のある社会でも「楽しく」生きられるというモデルを提示することにつながっていたと考えられる。モデルの不在はこれまでもセクシュアル・マイノリティと教育研究において論じられてきたことであるが〔加藤・渡辺, 2010; 日高, 2007など〕、セクシュアル・マイノリティ運動内においてもそのようなモデルを提示しようとしていたことが示せた。このことを再評価できたことは、これまでセクシュアル・マイノリティ運動における主体形成を対象としてこなかった教育学研究にも一つの論を提示できたという点で意義がある。

また、本論文が差別を乗り越えるための一研究になったとすれば、上記の意義だけでなく差別是正のための運動実践にも還元できるものになったと考える。至極当然かもしれないが、「研究のための研究」になってしまうことこそ、この「差別」や「人権」をあつかう研究にとってむなしなものはないのではなかろうかと、本稿を執筆する中で改めて深く感じることとなった。

最後に、自身の（あるいは、この研究に取り組む研究者の）課題を示して結びとしたい。第1に、「アカー（動くゲイとレズビアンのかい）」の活動をどのように位置づけるのかということである。本研究の表1では、南と同じく〈デモ〉の方に活動を位置づけた。わたし自身は、この区分は誤りではないと考えているが、アカーの活動と言っても、1990年代と2000年代では活動内容にも差があり、その点を十分に追えていない。アカーに関しては、アカー自体の活動を幾つかの時期にわけられるだろう（例えば、府中青年の家事件の前後というわけ方や、設立から府中青年の家事件までも幾つかの時期にわけられるとも考えている）²²⁾。第2に、〈中央〉— 〈周辺〉〔高橋, 2012〕と言った際の〈周辺〉でなされていた運動はどのように位置づくのかということである。1996年から2000年まで、〈中央〉東京でなされていた運動が小規模化していたとき、その時期を「支えた」のが札幌でのセクシュアル・マイノリティによる「マーチ」であったと、砂川も述べている。これらの運動や、大阪などの地方都市でなされていた運動はどのように位置づくのか。このことに関しては今回十分に検討しきれなかった。そのように考えると、本研究で表した《デモ／祭》枠組みは、〈中央〉での運動の構造を限定的に表したものであったといえるだろう。そして第3に、今日なされている〈中央〉

での大規模なセクシュアル・マイノリティ運動はどのように位置づくのかわかる点である。これら3点については、別稿で改めて論じたい。本稿で明らかにしたことをふまえ、よりつぶさにセクシュアル・マイノリティ運動、あるいはそこで活躍する人びとの主体形成や、セクシュアル・マイノリティを取り巻く社会を捉えることが、本研究の継続的課題である。

注

- 1) 本稿における「セクシュアル・マイノリティ」とは、「性的少数者」「性的マイノリティ」などと呼ばれている人びとのことをさす。
- 2) 筆者が本研究を深める中、2015年4月には文部科学省が「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を、翌2016年4月には「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」を発表し、また各政党が、セクシュアル・マイノリティの人権に関わる法整備を整えるための方針を議論するなど、「国家」レベルでの議論が進められてきた。
- 3) ここでいう「かれら」とは、女性／男性という二分法にこだわらず、広く人びとを指す言葉である。
- 4) 堀川 [2017b] の合評会時に聞いた学生の体験に起因する。学生は、留学先でセクシュアル・マイノリティによるパレードを目的した際に、楽しそうという感覚を抱き、その後そのパレードがセクシュアル・マイノリティによるものだ気づき、セクシュアル・マイノリティに対する思いが変化していったという。「座学」で「学習」したわけでもなければ、「学習会」をひらいて学んだわけでもない。むしろ、その場の「面白そう」な雰囲気に触れたことから、セクシュアル・マイノリティの抱える問題について知るところに行き着いたのである。この話を聞いた際、わたしは、“学び”とは何であったかということ再度考え直さねばならないと深く反省し、自身が書いた「女性学論文」での《デモ/祭》枠組みを再考しなければならないのではないかと考えたのである。この経験はわたしにとって大きなものであった。
- 5) 一般的には、他者が「再考」し、理論を深め、洗練させていくことが研究的な流れかもしれない。わたしの考えた理論も「普通」であれば、そのような「他者からの批判的検討」を待つべきであるのかもしれない。しかしながら、わたしがこれまで研究してきたセクシュアル・マイノリティ差別は今日的な問題であり、悠長に他者からの批判的検討を待っている場合ではないことは明らかである。これまでライフヒストリーを伺ってきた方や、いま実践を進めている方たちに対しての誠実な対応とは、「気がついたとき」にもったいぶらずに再考するということだと考えている。このような課題意識が本稿の執筆に大きく関わっていることを断りたい。
- 6) 社会運動における自己形成(あるいは「自己教育」)に着目した研究、とりわけ、ジェンダーとの関連で見なければ、婦人運動における婦人の教育・学習活動を対象にし、そこでなされる

女性たちの自己教育を分析した千野陽一 [1979] があげられる。千野は、対象設定の理由として、「民主主義的な婦人運動ないし民主的な婦人集団内部」でなされてきた「自己教育活動(学習活動)」が、「いわゆる社会教育としてついで意識され」てこなかったという社会教育研究の問題点を乗り越えるためだとし、婦人運動の中で活動していく女性たちを集団として捉えて分析するのではなく、運動の担い手たち一人ひとりの自己教育に着目しながら分析をおこなった [千野1979]。本研究もこのような研究の視点を参考にして、日本のセクシュアル・マイノリティ運動における運動の担い手たちの主体形成を明らかにしたいと考えている。

- 7) 砂川秀樹は、インタビューした2014年時点では、沖縄に在住していた。インタビューは、以下の日程で行われた。

日時：2014年10月13日(月) 15：00-18：00

場所：東京都新宿区

なお、本論文で史資料、インタビューデータを用いる際は、プライバシーの配慮から必要に応じて伏せ字などを用いる。また、補足をする場合は [] で括弧で表す。なお、そのほかの表し方をする場合は適宜それを示す。聞き手の発問については、プライバシーや文章化した際の読みやすさを考慮して文意が変わらない程度に表現を改めている。

- 8) 主体形成とは、「人々を、なりゆきまかせの客体から、自らの歴史をつくる主体にかえていく」(ユネスコ「学習権」宣言) ような、人間の形成過程における意図的・自覚的な生き方をはぐくむ、感情や意思、思想や行動の変化や発展の姿をさしている。
- 9) 砂川秀樹『パレード』[2001: 2-3]。なお、以下本書を用いる場合は、[] にページ番号のみを書き加えて表すこととする。
- 10) 長いが、以下に全文を引用する。なお、以下の文は日比野真「第3回レズビアン・ゲイ・パレード宣言(案)」『第3回東京レズビアン・ゲイ・パレードを巡るパレード資料集』ホームページより引用した。

第3回レズビアン・ゲイ・パレードは以下の通り宣言する。

私たちは日本国内の同性愛者および性的少数者の団体と個人からなるものである。

日本国憲法第14条にかかげる「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない」という理念に基づき、我が国は戦後50年間に民主主義の原則に合った、社会的少数者と弱者の権利を擁護する制度をつくり、その侵害に対する厳しい制約を設けてきた。当然、そこには同性愛者および性的少数者の人権と社会参加の均等な機会の保障もふくまれねばならない。

日本政府と地方自治体は日本国憲法第11条、第13条、第14条および国際人権規約と関連法を順守する義務があり、これに基づいて公的機関が同性愛者および性的少数者の権利を擁護し促進することを支援すべきである。しかし、日本政府および地方自治体の政策立案の過程

で同性愛者および性的少数者の権利は全く議論されてこなかった。

たとえば、

- 長年にわたり生活を共にした同居所帯の一方に対する相続権がない。
- 同居を希望する同性のカップルに住宅資金融資の資格がない。
- 同性所帯の一方が病気をした場合に介護するパートナーに対する保険の支給資格がない。
- 公的施設を借りて同性愛者および性的少数者の行事を行おうとする場合に、「同性愛者および性的少数者」の名称を表示出来ない。

など、同性愛者および性的少数者に対する不平等は、他の人びとが有する権利に比べて著しい差別を受けていることであるが、これらに対する検討はされてこなかった。

日本政府は子どもサミット（ニューヨーク）、環境サミット（リオ）、世界人権会議（ウィーン）、人口会議（カイロ）、エイズサミット（パリ）、社会開発サミット（コペンハーゲン）、世界女性会議（北京）と国連主催の政府間会議に参加してきた。しかし、これらの会議で約束した行動から日本政府は同性愛者および性的少数者への政策を除外し続けている。

以上の認識に基づいて、日本政府と地方自治体は以下のことに対して早急に対応することを全会一致で求めるものである。

1. 同性愛者と性的少数者に対する政策立案に、その当事者を参加させること。
2. 同性愛者および性的少数者に対するマスメディアの差別表現の事実を調査し、その改善を求めること。
3. 社会生活のあらゆる側面において同性愛者および性的少数者の顕在化を阻害する障壁をなくするための啓発活動を行うこと。
4. 学校における同性愛者および性的少数者に対する「イジメ」の実態を調査し、いかなる生徒も安心して登校出来るようにすること。
5. 同性愛者および性的少数者に対する社会の意識調査を行うこと。
6. 誰もが等しく医療を受ける権利を阻害している実態を調査し、その改善に努めること。
7. 国際人権規約に基づくカウンターレポートで同性愛者および性的少数者に関する報告を行うこと。
8. 国連会議の誓約に基づき、同性愛者および性的少数者への政策を実施すること。

また、私たちは、日本国内の同性愛者および性的少数者の諸組織が以下の行動を起こすことを呼びかける。

1. マスメディアの差別表現の事実を記録し、公表すること。
2. 学校における「イジメ」の実態を記録し、公表すること。
3. エイズ医療の状況改善のために当事者を支援すること。

- 4.個別に得た情報を公開し、相互協力による行動を起こすこと。
- 5.不公正に抗議し、政治的、経済的、社会的、文化的的基本権を促進するための連帯ネットワークを強化すること。
- 6.国連人権委員会に報告書を送るための協議機関をつくること。

1996年8月25日 第3回レズビアン・ゲイ・パレード

- 11) バディ編集部「熱狂！興奮！東京パレード&レインボー祭り」、『バディ 2000.11月号』
- 12) 『ジーマン』の特徴は、筋肉などの男性的要素が強い嗜好を主に扱っている点にある。現在は、休刊中である。
- 13) 「20世紀最後の夏僕達の心に残るこの夏のメモリアル」、『ジーマン 2000. 5月号』
- 14) 野宮亜紀・伏見憲明・春日亮二・川口昭美・砂川秀樹「すごく暑かったし、すごく楽しかった。：東京レズビアン&ゲイパレード2000●座談会」[砂川, 2001: 92-129]。
- 15) なお、伏見は一方で、「00年パレード」と、南定四郎による運動は「政治的」なスローガンを掲げるか否かという面においては、そこまで大差がなかったと語っている。
- 16) 砂川秀樹, 2003, 「レズビアン&ゲイ・パレードが与える希望」神奈川大学評論編集専門委員会『神奈川大学評論』45: 100-106.
- 17) アライ (ally) とは、セクシュアル・マイノリティ当事者ではないが、セクシュアル・マイノリティらや当事者の活動を支援するものをさす。砂川本調査インタビューによれば、日本に「アライ」という言葉を「輸入」したのは砂川本人とのこと。欧米でのセクシュアル・マイノリティの運動においては「アライ」をいかに増やすかという点も考えられ始めている。
- 18) 南は、1994年当時、「ゲイバーなどの性風俗街からも多少の反発はあった」と述懐している。それは、社会運動に対する印象が当時の「ゲイ・タウン」関係者にとってはあまりよくないものに映っていたと推測できる。当時のゲイ・タウン関係者の年齢層が学生運動や新左翼運動などの社会運動の「失敗」を肌で感じていた世代であるからかと考察できる。また、「ゲイバーに来る客、彼ら『寝た子を起こすな』という感覚があったのではないか」と南が考察しているように、ゲイバーに来店する客入り、つまり、利益が減るという恐怖感からセクシュアル・マイノリティ運動に対して反発を抱くコミュニティがあったとも考察できる(堀川インタビューによる)。
- 19) 攪乱という用語は、ジェンダー・セクシュアリティについて論じる際には、パトラーによる表現であると認識することが一般的である。しかしながら、砂川の用いる「攪乱」には、パトラーのいう意味合いは十分に読み取ることができない。むしろ、社会におけるセクシュアル・マイノリティに対するイメージを「混乱」させるというような意味合いで砂川は用いているように分析できる。よって、本稿で砂川が述べている表現には、〈攪乱〉という表記を用いる。
- 20) 紙幅の都合上、南とアカーに関する議論の整理は十分にはできなかった。堀川 [2015・

2016] を併せて参照されたい。

- 21) 伏見憲明によるコメント。伏見は、自身も「僕自身の役割としては」「遠くから見張る番犬のように睨みをきかせていようという」スタンスだったと述べているように、このパレードを「支えよう」と意識していたという [96-99]。
- 22) アカーの時期区分に関しては石田仁さんから示唆を受けた。深く感謝いたします。

文献

- 千野陽一, 1979, 『近代日本婦人教育史』ドメス出版。
- Freire, Regulus, Neves, Paulo, 1992, *Pedagogia da Esperança Um reencontro com a pedagogia do oprimido*, Paz e Terra, São Paulo (=2001 『希望の教育学』里見実訳 太郎次郎社)。
- , 1970, *Pedagogia do Oprimido*, Paz e Terra, Rio de Janeiro (=2011, 三砂ちづる訳『被抑圧者の教育学—新訳』垂紀書房)。
- 伏見憲明, 2003, 『同性愛入門』ポット出版。
- , 2004, 『ゲイという [経験] 増補版』ポット出版。
- 藤谷祐太, 2008, 「トラブルを起こす/トラブルになる——1990年『府中青年の家同性愛者差別事件』と1991年から1997年の『府中青年の家裁判』を事例として」*Core ethics : コア・エシックス* 4: 319-332。
- 日高庸晴ほか, 2007, 「ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2」(厚生労働省エイズ対策研究事業)「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」成果報告。
- hooks, bell, 1994, *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom*, Routledge, London (=2006, 里見実監訳『とびこえよ、その囲いを—自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社)。
- , 2000, *Feminism is for Everybody: Passionate Politics*, Pluto press, London (=2003, 堀田碧訳『フェミニズムはみんなのもの』新水社)。
- 堀江有里, 2015, 『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版。
- 堀川修平, 2015, 「日本のセクシュアル・マイノリティ運動の変遷からみる運動の今日的課題——デモとしての「パレード」から祭りとしての「パレード」へ」*日本女性学会『女性学』* 23: 64-85。
- , 2016, 「日本のセクシュアル・マイノリティ (運動) における「学習会」活動の役割とその限界——南定四郎による〈運動〉の初期の理論に着目して」*ジェンダー史学会『ジェンダー史学』* 12: 51-67。
- , 2017a, 「セクシュアル・マイノリティに引かれる『境界線』」『総合人間学』11(1): 55-66。
- , 2017b, 「第8章 〈性〉の多様性とジェンダー」笹川あゆみ編著『ジェンダーとわたし: 〈違和感〉から社会を読み解く』北樹出版, 131-149。

- 飯野由里子, 2004, 「日本のレズビアン・フェミニストのストーリーを読み直す」 日本解放社会学会『解放社会学研究』18: 18-38.
- , 2008, 『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院.
- 井田真木子, 1997, 『もうひとつの青春: 同性愛者たち』文藝春秋.
- 風間孝, 2002, 「カミングアウトのポリティクス」 日本社会学会『社会学評論』53 (3): 348-364.
- ほか, 1998, 『実践するセクシュアリティ』動くゲイとレズビアンの会.
- ほか, 2010, 『同性愛と異性愛』岩波書店.
- 加藤慶・渡辺大輔編, 2010, 『セクシュアルマイノリティをめぐる学校教育と支援: エンパワメントにつながるネットワークの構築にむけて』開成出版.
- 釜野さおりほか, 2016, 『性的マイノリティについての意識——2015年全国調査報告書』文部科学省科学研究費「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ編.
- 河口和也, 2003, 『クィア・スタディーズ』岩波書店.
- キース・ヴィンセント, 1997, 「誰が、誰のために?」『現代思想』青上社, 25 (6): 8-17.
- ほか, 1997, 『ゲイ・スタディーズ』青上社.
- 前川直哉, 2014, 「第9章 1970年代における男性同性愛者と異性婚——『薔薇族』の読者投稿から」 小山静子ほか編著『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, 197-220.
- , 2017, 『〈男性同性愛者〉の社会史——アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』作品社.
- 南定四郎, 1972, 『ホモロジー入門』第二書房.
- , 1996, 「日本のレズビアン／ゲイ・ムーブメントの歴史と戦略」クィア・スタディーズ編集委員会編『クィア・スタディーズ' 96』七つ森書館, 172-181.
- , 2002, 「戦後の同性愛者50年の軌跡(3)」『同性愛学』南定四郎〔未刊行〕.
- , 2014a, 『同性愛を生きる』TYPISA RECORD.
- , 2014b, 「性的少数者の「共同幻想」について的小論」『小文芸誌 寛iii』TYPISA RECORD.
- アカー, 1993, 『同性愛報道の手引き』.
- , 1998, 『同性愛者と人権教育のための国連10年』.
- クィア・スタディーズ編集委員会編, 1996, 『クィア・スタディーズ' 96』七つ森書館.
- , 1997, 『クィア・スタディーズ' 97』七つ森書館.
- 砂川秀樹, 2001, 『パレード 東京レズビアン&ゲイパレード2000の記録』ポット出版.
- , 2003a, 「『ゲイ・コミュニティ』の形成① コミュニティ意識の高揚」『季刊セクシュアリティ No.9』エイデル研究所, 138-141.
- , 2003b, 「レズビアン&ゲイ・パレードが与える希望」 神奈川県広報委員会『神奈川県学評論』45: 100-106.
- , 2015, 『新宿二丁目の文化人類学 ゲイ・コミュニティから都市をまなぐす』太郎次郎

社エディタス。

高橋哲哉, 2012, 『犠牲のシステム 福島・沖縄』 集英社。

山内昇, 1963, 「デモで逢えなかった会員の声: 安保から三年のメーデーに」『思想の科学』 思想の科学社, 15: 47-51.

———, 1971, 『留置所学入門』 虎見書房。

渡辺大輔, 2009, 『若年ゲイ男性のアイデンティティ形成プロセスにおける発達課題からみた分離的な公的教育空間のもつ意義の再検討』(東京都立大学博士論文、未刊行)。

参考インターネット記事(最終アクセス日2017年12月23日)

日比野真「第3回レズビアン・ゲイ・パレード宣言(案)」『第3回東京レズビアン・ゲイ・パレードを巡るパレード資料集』 <http://barairo.net/special/3rdparade/iinnkai/sengen.html>

謝辞

修士論文執筆時からお世話になっている砂川秀樹さんと南定四郎さんに厚く御礼申し上げます。2014年の初めてのインタビューは、わたし自身の研究観だけでなく、生き方・ふるまい方を見直すきっかけになりました。あの日のことを忘れずに今後も研究を続けていきたいと思います。また、本稿執筆に至るまでに多くの方の支えがあったことは言うまでもありません。いつもわたしの研究と実践とが乖離しないように見守り、お気遣いくださる皆さんに深く感謝申し上げます。

(ほりかわ・しゅうへい 東京学芸大学)